

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520160

研究課題名（和文） 元禄以前往来物版本の書誌解題研究に基づく近世前期出版研究

研究課題名（英文） A publication study in the first half before Genroku in the early modern times based on the bibliography explanatory notes study of the OURAIMONO printed book

研究代表者

母利 司朗（MORI SHIRO）

京都市立大学・文学部・教授

研究者番号：10174369

研究成果の概要（和文）：近世出版の中で、往来物版本は非文学資料という性格上、等閑に付されてきたきらいがある。本研究では、従来注目されてこなかったこの往来物版本を近世出版研究の有効な資料としてとりあげ、書誌解題研究を通して元禄以前の出版研究をおこなった。主としてとりあげたのは不明な点の多い大坂での出版物である。

研究成果の概要（英文）：The OURAIMONO printed book is apt to have had been referred to disregard in the character called the non-literature document in publication in the early modern times. In this study, I took up this OURAIMONO printed book that did not attract attention conventionally as an effective document of the publication study in the early modern times and studied publication before the Genroku era through a bibliography explanatory notes study. It is mainly a publication in Osaka with many any questions to have got together.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学

## 1. 研究開始当初の背景

出版研究は、近世文学研究の中で近年特に進展を見つめる分野である。しかし、多くの場合、それぞれの文学作品そのものの書誌的研究が中心となっているため、個別の作品論とどうしても関連付けた研究方法となってしまう、ある現象が他の作品の版本にもあ

てはまることなのかどうかの判断に迷うことが少なくない。そこで当時の出版の実態をより客観的に見るために、当時の典型的な出版物であった往来物というジャンルの版本をとりあげ、個別な作品論に影響されない、より一般的・普遍的な版本の特徴を考察するのが有益ではないかと考えた。往来物の研究

は、日本文学・教育学・歴史学などにまたがる学際的な領域であり、版本についても従来ほとんど研究のなされていない状態であった。

## 2. 研究の目的

往来物は当時の出版物においては、純然たる消耗品であり、大量出版・大量消費を前提に作られていた、商業出版ならではの出版物である。ゆえに、文学作品の出版物よりもいっそうその中に当時の出版技法や出版慣習が現れやすいと推察し、その解題研究を通して、近世出版研究の問題を解明しようとした。

## 3. 研究の方法

近世出版研究の中でも、元禄時代以前については、資料そのものの残存量が絶対的に少ないという事情もあり、研究成果は個別な作品研究のレベルにとどまっている。また従来その存在の判明していなかった版本が少なくない。本研究では、出版研究上重要と思われる新出版・稀覯本の発掘およびその解題研究と紹介という作業を通じて、当時の出版研究全体に関わる諸問題を解明する方法をとった。

## 4. 研究成果

(1) 本課題研究期間内に公刊された研究成果には「元禄以前の大坂版往来物」(『東海近世』第18号、2009年)がある。

本研究は、近世前期における三都の出版の中で最も謎の多い大坂の出版を対象とし、元禄以前に出版された新出および稀覯の往来物版本を数点解題紹介した。

大坂の本屋の単独出版は、先人の多大な調査によっても、現在寛文13年(1673)をさかのぼることができない。つまり出版の開始自体が京・江戸に比べてかなり遅いわけであるが、それぞれの町で出版がはじまる最初の頃に登場してくるはずの往来物で、確実に大坂出来だと確認されているものは、既知の資料によるかぎり、延宝6年(1678)刊行の『浪花往来』まで俟たなければならず、その後の出版もしばらくは寥々たるものにすぎない。これは実際を反映しているのか、それとも往来物版本の散逸によって、たまたま寛文13年近くのものが見あたらない、ということなのか、という疑問をもった。

そこで、塩村耕氏作成の「元禄末年以前の大坂版元と出版物一覧」を基本として、母利および研究協力者である小泉吉永蔵本によって補えるものを調査して加えたのが、次の貞享末年までの大坂版往来物の出版一覧である。

- 1 寛文13年・本屋市兵衛版『増補今川抄』  
小泉蔵
- 2 延宝6年・荻野八郎兵衛版『浪花往来』

(早川正斎書)

- 3 延宝7年・西沢太兵衛版『七ついろは』  
小泉蔵
- 4 延宝9年・本屋(作本屋・正本屋)八兵衛版『御成敗式目』(武藤正察書) 母利蔵
- 5 天和2年・秋田屋市兵衛版『〈新板尊円〉御成敗式目』 小泉蔵
- 6 天和3年・池田屋三郎右衛門版『女諸礼集』(求版) 小泉蔵
- 7 天和3年・本屋平兵衛(愚常)版『庭訓往来』(平野仲安書) 母利蔵
- 8 貞享2年以前刊『大坂往来』(平野仲安書) ※『貞享二年書目』に記載される『大坂名所往来』か。 版元不明。大坂版か。
- 9 貞享2年・毛利田庄太郎版『童子教手本』 母利蔵
- 10 貞享4年・本屋五兵衛版『庭訓往来』(堀流水軒書) 母利蔵
- 11 貞享5年・塩屋七郎兵衛版『日本往来』 ※同年の刊記をもつものに、本屋三郎兵衛版、象牙屋三郎兵衛版あり。

元禄年間ともなれば、大坂でも往来物の出版そのものが飛躍的に増え、伝存数も一挙に増えるが、貞享末年以前に絞れば、以上が初期大坂出版の往来物のすべてである。

特に寛文13年本屋(大野木)市兵衛版『増補今川抄』は、従来大坂単独版として最も早い出版年として知られる寛文13年の出版物であり、きわめて貴重である。まず注目されるのは、小泉吉永所蔵の『増補今川抄』である。

本書の作者脇野光正は、『国書総目録』によれば、他に『算法一起』(延宝3年成、正徳5年刊)という和算書の著作がある。内容は、先行する『今川状』の注釈を「抄に云く」という形で引用し、加えて「愚云く」と自らの考えを増補したものであるが、その元とした注釈が何であったのかは不明。本来は上下2冊本であったと推定されるが、現存本は小泉氏蔵の大本下冊のみの零本である。同本は、改装表紙に、「新板増補今川抄 下」という元の題籤が張り直されており、本文の末尾には、小さく「寛文十三癸丑年七月初旬 心齋橋筋本屋市兵衛」という刊記が記されている。

本書の意義は、いうまでもなく、この寛文13という年号が何を表すか、ということである。ちなみに寛文13年という年は、西鶴の『生玉万句』、あるいは深江屋太郎兵衛版『窈誓伝』など、現時点で、大坂の本屋が単独で出版したことの判明している最も古い年次である。

版元の本屋市兵衛とは、例の秋田屋大野木市兵衛。元禄年間にはすでに多くのオリジナルの出版をおこなっていた本屋であ

るが、実は求版も盛んにおこなっていた。『好色一代男』の求版はよく知られるところだが、寛文9年の刊記をもつ『書翰初学抄』という往来物も、京都の谷岡七左衛門版の求版後刷本である。

早い時期の刊記をもつ大坂版、たとえばこの秋田屋版などでは、このような求版の可能性を常に念頭に置かねばならない。しかし、この『増補今川抄』については、本文の書体、「寛文十三年」という年号の書体、そして「本屋市兵衛」という本屋名の書体、この三者の間にこれというはっきりとした違和感を感じない。おそらく秋田屋が寛文13年にオリジナルに出版したものではないだろうか。とすれば、この『増補今川抄』もまた新たに最初の大坂版に加えてよい、ということになる。

他に、本屋平兵衛（愚常）版『庭訓往来』も注目される。本書は、末尾に寛文8年後松軒仲安の花押のある手本を版下にして、天和3年、大坂の本屋平兵衛が出版した『庭訓往来』である。大本一冊。筆者の後松軒仲安は、西鶴の『日本永代蔵』に、

また一人は泉州堺の者なりしが、万に賢こ過て、芸自慢してこゝに下りぬ。手は平野仲庵に筆道をゆるされ、茶の湯は金森宗和の流れを汲、詩文は深草の元政に学び、連俳は西山宗因の門下となり……。

（巻2の3「才覚を笠に着る大黒」）

とその名が載せられ、『難波雀』（延宝7年刊）以下の大坂の案内記類には、「手跡」の項に「米や町 平野忠庵」として例外なくその名をあげられる、当時大坂で最も名のあった書家の一人である。今日でも彼の筆になる肉筆手本はかなりの数が残っている。仲安の版下になる往来物版本としては、他に貞享2年以前の出版と推定される『大坂往来』と、大阪府立岸和田高校所蔵『新板今川』がある由であるが、後者については未見である。一方、版元の本屋平兵衛は、本屋愚常とも名乗る大坂の有力な本屋である。大坂版リストによれば、初期は『ぬれがらす』（延宝7年刊）・『続無名抄』（同8年刊）・『大坂八百韻』（同9年刊）などの談林系俳書の出版を専門にしていたようであるが、同じ時期のこの手本の出版は知られていなかった。

ただ本屋平兵衛は「書家平兵衛」とも名乗ることがあったらしく、『執筆法諺解』（延宝8年刊）・『和漢筆仙集』（貞享二年刊）等の出版と同じく、当時大坂で高名だった書家平野仲庵への関心から出版されたものかと思われる。往来物を代表する『庭訓往来』の大坂版の最初は、従来貞享4年出版の堀流水軒の手本かと考えられていたが、この本の出現により、その最初

を数年引き下げることができた。それにしても、往来物の中で一番確実に売れるはずの『庭訓往来』の出版が、大坂では天和年間まで遅れるというのはやはり奇妙であり、さらに古い大坂版があった可能性は大きい。

本書の体裁で注目されるのは、実はその表紙である。現状の表紙は、表皮がほとんど剥離・剥落してしまっており、わずかに残っている部分も日焼けによる変色が甚だしく、その本来の状態をうかがうことは容易ではない。しかし残っている部分を子細に見てみると、表紙の文様はどうやらあの有名な雷文繫地卷龍文であることがわかる。本来は、全体が華麗な文様で埋め尽くされた表紙であったようなのである。

ところでこの文様は、木村三四吾氏の「『松の葉』」考他にとりあげられるほど、近世出版研究の上で注目されてきた文様である。これらによれば、江戸で寛文前後から草子類の表紙として流行していた雷文繫地卷龍文が上方で行われ出すのは天和・貞享頃であるとされ、その意味で、この平野仲安の『庭訓往来』などは、この文様の上方における流行のはしりだったといえるかと思われる。

ちなみに当時の往来物の版本には他にこの文様の表紙を見ることなく、異色の文様だったと言える。往来物全体の中では、わずかに『無覚悟状』『大坂状絵抄』（ともに小泉吉永蔵）の表紙にこの文様をもつものがあるが、これらはどちらも元禄以後、江戸中頃の出版になる往来物と考えられる。

その他、延宝9年本屋（作本屋）八兵衛版『御成敗式目』、貞享4年本屋（正本屋・伊勢屋）五兵衛版『庭訓往来』といった主として新出の大坂版往来物を取りあげた。

これらはいずれも刊行点数の少ない初期大坂版の往来物である。大坂の出版は、その開始の時期が、京都はむろん、江戸にくらべても格段に遅いが、その初期における往来物の出版物の少なさが謎の一つであった。なぜなら、本来、往来物は典型的な消耗品であり、商業出版として危険の少ない商品の代表であったからである。これらの新出資料により、大坂においても着実に往来物の出版されていたことが確認された。また今後も新出資料の出現する可能性は高い。

(2) なお残念ながら研究成果を公刊することが時間的にかなわなかったが、元禄前後に大坂で活躍した書家・狂歌師である永井如瓶（名は喜、字は政純、号は走帆・如瓶など）の肉筆手本、延宝前後に『四季仮名往来』『富士野往来』などの手本を出版した置散子の肉筆手本、短冊屋八左衛門なる者が商業的に制

作した『詠歌大概』巻物などを収集できた。かれら能筆の書家たちは、手習い塾を開き門人を指導する傍ら、より大量の手本の需要を見込んで、多くの往来物手本を出版していたと考えられるが、その肉筆手本の出現はほとんどなく、今後、書籍文化を支えた彼ら書家たちの動向をさぐることによって、近世出版文化の新たな側面が見えてくることが期待される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 母利司朗、元禄以前の大坂版往来物、『東海近世』、第 18 号、査読有、2009 年、1-13 頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

母利 司朗 (MORI SHIRO)  
京都府立大学・文学部・教授  
研究者番号：10174369

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：